



結核の研究者（その2）

（前号の続き）

—それまで結核に関する知識は。

知識も関心もゼロでした。ですから、三ヶ月で300冊の本を読みました。毎日3冊ですよ。3時間睡眠で、朝七時くらいに寝て10時ごろに起き出す。それでも苦に思ったことはなく、憑依体験というのか、何かに乗りうつられたような体験をしました。こんなことを言うと変な目で見られるかも知れませんが、300冊の本を後ろに積んで読んだり書いたりし、あの本のあの引用が必要だと思って、振り向きざまに積まれた本から一冊抜き出してページを開くと、そこに探していた記述がある。自分でもちょっと気持ち悪い感じがしましたが、今学生には、そこまでやるとどんな研究も面白くなると言っています。

—結核という病気のどこに惹かれたのですか。

一つは「美人薄命の病気」「天才の病気」として扱われていたこと。それが、海外でも同じイメージを持たれていたということです。ギリシャ時代に文献にも、8世紀の中国、唐の時代の書物にも、目が大きくなってキラキラするといったことが書かれているのです。また「情熱が沸く病気」「美人になる病気」という記述もあります。微熱のせいもあるでしょうし、栄養をたっぷり取って静養しているわけですからね。（中略）

—歴史を大きく変えてしまったペストに比べ、結核は研究テーマとして小さいという不満は持ちませんでしたか。

個人にとっては結核も、ペストと同じくらい大きな問題ではなかったかと思います。当

時は不治の病。「あなたは結核ですよ」と言われたら、来年は死んでいるわけですから。その時、人間は何をするのかということは、社会的に大きい小さいではなく、個人にとって切迫した問題だったと思います。社会的なスケールも大切だけど、個人の生活の観点ではまったく同じダイナミズムが働いていたのではないかと。

おそらく森鷗外は生涯結核で苦しんだのですが、誰にも言いませんでした。日本文学史には萎縮胃と書いてあります。なぜならば、もしも家庭の中で結核患者がいると分かると、結婚もできなくなるし、就職も難しくなる。ましてや日本でトップクラスの階級を形成する家系が結核であることがわかるとまずい。ですから、隠し通したのです。そこまで重要な問題だったということです。彼は医者ですから、自分で自分の唾を毎日のように顕微鏡で見っていたことでしょう。そしてある時ふと妻が結核であることを知り、離婚したというのが私の意見なんです。（中略）

堀辰雄は、結核になり「こんな病気はいやだ」と言っているのに、戦後アメリカから特效薬としてストレプトマイシンが入ってきた時、彼はそれを拒否しました。大卒の初任給が3000円、4000円の時代に注射代一本が1万円くらいしたらしいのですが、拒否した理由は、「僕から結核を取り除いたら、いったい何が残るんだ」というもの。『風立ちぬ』を書いた堀辰雄にとって、結核であることがそこまで彼の人生そのものだったということです。

（出典：学士会会報「U 7」2013年11月）